

青年期の対人関係に関する研究 (Ⅳ) —対人関係における対処行動と友人関係、対人不安との関連について—

八 木 成 和

(平成20年3月28日受理 最終原稿平成20年5月20日受理)

本研究では、第一に、対処行動が網羅的に含まれているTAC-24の項目をもとに、対人関係用に修正した対人関係用対処行動尺度を作成し、その因子構造について確認することを目的とした。第二に、作成した対人関係用対処行動尺度と友人関係、対人不安との関係について471名の大学生を対象に検討することを目的とした。

その結果、第一に、対人関係用対処行動尺度において神村他(1995)と同様に8つの因子が抽出された。第二に、小学生、中学生、高校生の3つの時期に悩んだ程度と対処行動の関係を検討した結果、中学生と高校生の時期によく悩んだ経験のある人の方が、ポジティブな対処行動を現在とっていることが多かった。しかし、ネガティブな対処行動では差がなく、過去に友人関係について悩んだ経験は、ポジティブな対処行動の形成に関係していることが考えられ、発達の観点から今後検討することが必要と考えられる。対人不安との関係では、「カタルシス」や「肯定的解釈」というポジティブな対処行動で関連が見られ、「放棄・あきらめ」や「責任転嫁」というネガティブな対処行動でも関連が見られた。

キーワード：青年期、対処行動、対人不安、友人関係

問題と目的

青年期は家族から独立し、主に学校での友人との関係が生活の中心となる。集団生活を送る中で友人との関係に悩むことが多くなり、対人不安は、友人と関わる上で非常に重要な問題となる。これまで対人不安尺度が作成され(林・小川, 1981; 八木, 2004など)、対人不安と関連する要因や性差について検討されてきた。

八木(2004)では、対人不安尺度を作成し、第1因子「対人的緊張・あがり」因子、第2因子「自己卑下・劣等感」因子、第3因子「他者の印象への過剰意識」因子、第4因子「他者からの受容」因子、第5因子「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子の5つの因子を抽出した。また、八木(2005)では、対人不安尺度の5つの因子と、公的自意識と私的自意識、自尊感情、楽観主義との関連の仕方が性別によって異なるかどうかを検討された。その結果、特に、公的自意識は、男女間で対人不安と関連の仕方が異なり、対人関係の状況において、男性の方は他者からのネガティブな評価を恐れる傾向が重要な意味をもっており、女性の方は自分自身に自信がないという意識が重要な意味をもっていることを示唆した。そして、八木(2008)では、426名の大学生を対象に、青年期における重要な発達課題として、対人関係において積極的に他者と関わろうと

する傾向を高める社会的外交性と親への依存から独立への過程、すなわち、独立性の要因を重要と考え、対人不安との関連を検討した。その結果から、青年期の大学生に対して対人不安を低くするような試みによって、社会的外向性を高め、独立性を高めることにつながることを示唆した。

以上の研究から青年期において対人不安は、自分と相手との関係についての意識や自意識、社会的外交性、独立性が影響していた。また、影響の仕方は男女によって異なっていた。したがって、対人不安が高いか低いかは、集団生活に適応していく上で非常に大きな影響を与えていると考えられる。これは対人関係において生じる欲求不満状態や葛藤状態のような問題に対して具体的にどのように行動するのかということに影響するものである。対人関係場面ではお互いの欲求がぶつかりストレスがかかることが多く、これまでも青年期の適応に関して対人関係におけるストレスは重要視されてきた。

例えば、橋本（1997）は対人ストレスイベント尺度を作成し、対人ストレスイベントを分類した結果、対人葛藤、対人劣等、対人磨耗という3種類の対人ストレスイベントを見出している。また、尾関（1993）では大学生599名を対象にストレッサー尺度を用いて友人関係に関するストレッサーの体験率として「友人の悩みや問題」が47.7%、「友人の減少」が30.2%、「友人の非難・誤解」が37.6%、「友人などの裏切り行為」が13.5%であることを示している。

このような対人関係におけるストレスに対して適応していく上で具体的な行動的側面として従来から対処行動（コーピング；coping）が考えられ、「ストレッサーを処理しようとして意識的におこなわれる認知的努力（行動および思考）」と定義されている（Lazarus, R. S., & Folkman, S., 1984）。そして、この対処行動を測定する多数の尺度が作成されてきた。我が国でもラザラス式ストレス・コーピング・インベントリー（Stress Coping Inventory [SCI]）が標準化され、市販されている（日本健康心理学研究所, 1996）。

これ以外では、例えば、加藤（2000）は対人ストレスイベントに対する対人ストレスコーピング尺度を作成し、ポジティブ関係コーピング、ネガティブ関係コーピング、解決先送りコーピングの3つの下位尺度を見出している。そして、「パーソナリティ→媒介過程〔認知的評価→コーピング〕→精神的健康」という対人関係ストレスの過程があることを示し（加藤, 2001）、友人関係との関連から親密性とポジティブ関係コーピングとの間で関連があることを示している（加藤, 2007）。また、佐藤（1996）は大学生が現在、抱えている困難な問題そのものへの対処と、その問題に伴って生じる感情への対処を含めた対処行動尺度を作成し、取り組み、サポート利用、気晴らし、問題の否認、空想への逃避という5つの因子を見出している。そして、親以外の重要な対象への安定した愛着が形成されていることが機能的な対処行動と関連していることを示している（佐藤, 1997）。

以上のようなストレスに対する対処行動を測定する従来の尺度に対して、神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野（1995）は、1「問題焦点－情動焦点」（具体的な問題解決か情動調整か）、2「接近－回避」（積極的に関わる態度か回避ないし無視して距離をおこうとする態度か）、3「反応系（認知－行動）」（機能は認知系か行動系か）という3つの軸を想定し、8つの象限からなる尺

度 (TAC-24) を作成している。具体的な8つの象限は、①「カタルシス」(接近－情動焦点－行動)、②「肯定的解釈」(接近－情動焦点－認知)、③「情報収集」(接近－問題焦点－行動)、④「計画立案」(接近－問題焦点－認知)、⑤「気晴らし」(回避－情動焦点－行動)、⑥「回避的思考」(回避－情動焦点－認知)、⑦「責任転嫁」(回避－問題焦点－行動)、⑧「放棄・あきらめ」(回避－問題焦点－認知)である。分析の結果、上記の8つの因子の存在が確認され、これまでに研究されてきた対処行動の多くが含まれていると思われる。

以上のことから、本研究では、第一に、対処行動が網羅的に含まれている神村他 (1995) の項目をもとに、対人関係用に一部修正した対人関係用対処行動尺度を構成し、その因子構造について確認する。第二に、一部修正して作成した対人関係用対処行動尺度と友人関係、対人不安との関係について検討することを目的とする。

研 究 I

目 的

本研究では、神村他 (1995) で作成されたTAC-24の項目をもとにして対人関係用に修正した対人関係用対処行動尺度の因子構造の確認を行うことを目的とする。

方 法

(1) 調査対象者：大阪府内の大学に通う大学生508名を対象とした。回収率は97.9%であった。欠損値を含む1名分のデータを除いた有効回答数は425名 (99.8%) であった。

男性237名 (55.8%)、女性188名 (44.2%) であった。平均年齢は18.83歳 (SD=1.07) であった。

(2) 調査期間：2005年7月から2005年12月の間に調査を実施した。

(3) 調査項目：神村他 (1995) をもとにして、教示及び項目を対人関係に関する内容に限定して尋ねるように一部修正して対処行動尺度24項目を作成した。回答形式は4段階評定 (1.いつもそうする、2.時々そうする、3.たまにそうする、4.全くしない) とした。項目作成時に一部を修正して使用した神村他 (1995) の尺度は以下の8つの象限から構成されていた。すなわち、「カタルシス」「放棄・諦め」「情報収集」「気晴らし」「回避的思考」「肯定的解釈」「計画立案」「責任転嫁」であった。

(4) 調査手続き：調査者が調査対象者の各自に配布し、記入後回収した。

結果と考察

対処行動尺度24項目について因子分析 (主成分分析、Oblimin解) を行った。分析にあたっては、神村他 (1995) で実施された因子分析と同じ手法を用いた。その結果、1項目だけ2つ以上の因子への寄与率が高かったため、本分析から除外した上で再度同じ因子分析を行った。そして、23項目について神村他 (1995) と同様に8因子が抽出された。本分析の結果および項目別平均値とSDをTABLE1に示した。累積寄与率は69.4%であり、第8因子以外は固有値1.0以上であった。因子名は、神村他 (1995) と同じ因子名を使用した。すなわち、第1因子「カタルシス」、第2因子「放棄・諦め」、第3因子「肯定的解釈」、第4因子「計画立案」、第5因子「回避的思考」、

第6因子「責任転嫁」、第7因子「気晴らし」、第8因子「情報収集」と命名した。

因子ごとに内的整合性係数（Cronbachの α 係数）によって信頼性を検討した。その結果をTABLE1に示した。第6因子だけ2項目であり、それ以外の因子は3項目で構成される。第1因子「カタルシス」 $\alpha = .84$ 、第2因子「放棄・諦め」 $\alpha = .75$ 、第3因子「肯定的解釈」 $\alpha = .68$ 、第4因子「計画立案」 $\alpha = .72$ 、第5因子「回避的思考」 $\alpha = .73$ 、第6因子「責任転嫁」（2項目） $\alpha = .57$ 、第7因子「気晴らし」 $\alpha = .69$ 、第8因子「情報収集」 $\alpha = .75$ であった。第6因子「責任転嫁」の α 係数が2項目のため.57でやや低かったが、他の因子では α 係数は高い数値が得られた。神村他（1995）では、8因子の α 係数は、.65～.84の幅にあり、本研究の尺度の信頼性は確保できたと考えられる。

研 究 II

目 的

本研究では、研究Iで作成された対人関係用対処行動尺度と友人関係に関する意識、対人不安との関連を検討することを目的とする。

方 法

(1) 調査対象者：大阪府内の大学に通う大学生508名を対象とした。回収率は94.9%であった。欠損値を含む11名分のデータを除いた有効回答数は471名（97.7%）であった。

男性297名（63.1%）、女性174名（36.9%）であった。平均年齢は19.54歳（SD=.98）であった。

(2) 調査期間：2006年7月から2007年12月の間に調査を実施した。

(3) 調査項目：①研究Iで検討した対人関係用対処行動尺度の24項目を使用した。回答形式は研究Iと同じく4段階評定とした。この尺度は「カタルシス」「放棄・諦め」「情報収集」「気晴らし」「回避的思考」「肯定的解釈」「計画立案」「責任転嫁」の8つの因子からなる。

②友人関係に関する5項目を作成した。小学生、中学生、高校生の各時期に友人関係で悩んだ程度を尋ねた。回答形式は3段階評定（1.よく悩んだ、2.ときどき悩んだ、3.まったく悩まなかった）とした。また、友人との間で自他相互に受容されていると感じているかどうかを尋ねた。回答形式は5段階評定（1.とても受け入れられている〔受け入れている〕、4.少し受け入れられている〔受け入れている〕、3.どちらともいえない、4.あまり受け入れられていない〔受け入れていない〕、1.まったく受け入れられていない〔受け入れていない〕）とした。

③八木（2004）で作成された対人不安測定尺度の35項目を使用した。回答形式は7段階評定（1.全然あてはまらない、2.あてはまらない、3.ややあてはまらない、4.どちらともいえない、5.ややあてはまる、6.あてはまる、7.非常にあてはまる）とした。この尺度は以下の5つの因子から構成された。すなわち、「対人的緊張・あがり」因子、「自己卑下・劣等感」因子、「他者の印象への過剰意識」因子、「他者からの受容」因子、「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子の5因子であった。

(4) 調査手続き：調査者が調査対象者の各自に配布し、記入後回収した。

青年期の対人関係に関する研究（Ⅳ）

TABLE 1 各項目の因子負荷量（斜交回転）・信頼性係数（Cronbach のアルファ係数）・平均値（SD）

No.	質問項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	第7因子	愛8因子	共通性	M	SD
Cronbach のアルファ係数		.84	.75	.68	.72	.73	.57	.69	.75			
1	誰かに話を聞いてもらい、気を晴らす。	.904	-.122	.002	.034	-.091	.098	.242	-.282	.833	2.86	1.04
2	誰かに愚痴をこぼして憂さを晴らす。	.833	-.017	-.093	.024	-.058	.191	.170	-.269	.705	2.67	1.02
3	誰かに話を聞いてもらい冷静さを取り戻す。	.824	-.099	-.065	.094	-.127	.105	.198	-.303	.698	2.60	1.01
4	自分では手におえないと考え放棄する。	-.109	.849	.049	-.167	.316	.252	.000	-.023	.748	1.88	.89
5	対処できない問題だと考え、放棄する。	.015	.821	.036	-.200	.378	.278	.012	.046	.725	1.76	.84
6	どうすることもできず、解決を後延ばしにする。	-.112	.734	-.112	-.090	.074	.229	-.047	-.029	.571	2.20	.95
7	今後は良いこともあるだろうと考える。	.056	-.025	.772	.050	.189	.073	.264	-.095	.622	2.71	.99
8	楽観的に考える。	-.116	.036	.768	-.160	.310	.007	.122	-.013	.662	2.64	1.09
9	悪い面ばかりでなく良い面を見つけていく。	-.062	-.036	.722	.316	-.067	-.110	.312	-.128	.656	2.57	.94
10	原因を追求し、後の計画を立てる。	.032	-.195	.003	.837	-.115	.035	-.032	-.241	.728	2.23	1.00
11	どのような対策をとるべきか綿密に考える。	.098	-.108	-.075	.823	-.104	.009	.024	-.223	.702	2.23	1.01
12	過ぎた事の反省を踏まえ次にする事を考える。	-.086	-.108	.385	.694	-.014	-.214	.044	-.255	.638	2.62	.96
13	悩んでいることを忘れるようにする。	-.056	.294	.238	-.139	.848	.107	.109	.078	.740	2.24	.97
14	無理にでも忘れるようにする。	-.054	.289	-.012	.003	.825	.139	.064	.052	.741	1.83	.91
15	嫌なことは考えないようにする。	-.134	.076	.496	-.128	.700	.045	.061	.033	.646	2.59	1.02
16	責任を他の人に押し付ける。	.098	.224	.028	.024	.119	.886	.044	-.160	.812	1.43	.67
17	自分は悪くないと言い逃れをする。	.260	.397	.022	-.048	.100	.733	.138	.058	.642	1.84	.84
18	友達とお酒を飲んだり好きな物を食べたりする。	.309	.046	.220	.035	.111	-.002	.809	-.226	.688	2.51	1.08
19	スポーツや旅行などを楽しむ。	-.048	-.076	.194	.039	.016	.066	.792	-.192	.701	2.36	1.08
20	買い物やおしゃべりなどで時間をつぶす。	.365	.067	.201	-.077	.103	.075	.734	-.173	.603	2.47	1.05
21	力のある人に教えを受けて解決しようとする。	.263	.008	-.042	.111	-.018	.119	.170	-.830	.724	2.04	.98
22	詳しい人から自分に必要な情報を収集する。	.249	.049	.118	.376	-.158	.034	.234	-.802	.694	2.48	1.02
23	すでに経験した人から話を聞いて参考にする。	.371	.101	.219	.290	-.057	-.019	.316	-.766	.687	2.52	1.00
固有値		3.8	3.4	2.5	1.9	1.3	1.1	1.1	0.8			
寄与率		16.7	14.6	11.1	8.5	5.7	4.9	4.6	3.5			
累積寄与率 (%)		16.7	31.3	42.4	50.8	56.5	61.3	65.9	69.4			

結果と考察

(1) 対人関係用対処行動尺度の項目分析

24項目に関して、「全くしない」を1点、「たまにそうする」を2点、「時々そうする」を3点、「いつもそうする」を4点として得点化した。得点が高いほど、対処行動として行っていることを示している。この23項目の全体と男女別の平均値（SD）をTABLE2に示した。

項目ごとに、t検定により性差を分析した。t検定の結果をTABLE2に示した。有意な性差が見られたのは10項目であり、2項目で有意傾向が見られた（以下、カッコ内は性別の平均値 [SD] を示している）。4項目で男性の平均値の方が女性の平均値よりも有意に高かった。すなわち、「6.対処できない問題だと考え、放棄する。」（男性2.03 [.92]；女性1.84 [.80], $p<.05$ ）、「20.どのような対策をとるべきか綿密に考える。」（男性2.40 [1.03]；女性2.17 [.99], $p<.05$ ）、「22.

TABLE 2 対人関係用対処方略尺度項目の全体と男女別の平均値（SD）

NO	項 目 内 容	全 体		男 性		女 性		t 値	
		M	SD	M	SD	M	SD		
	「カタルシス」因子	7.69	2.66	6.84	2.53	9.13	2.23	9.91	**
1	誰かに話を聞いてもらい冷静を取り戻す。	2.46	1.01	2.15	.96	2.99	.87	9.45	**
2	誰かに話を聞いてもらい、気を晴らす。	2.68	1.04	2.35	.99	3.24	.87	9.73	**
3	誰かに愚痴をこぼして憂さを晴らす。	2.55	1.04	2.33	1.04	2.91	.93	6.02	**
	「放棄・あきらめ」因子	6.37	2.12	6.51	2.22	6.15	1.93	1.76	+
4	どうすることもできず、解決を後延ばしにする。	2.41	.96	2.42	1.00	2.39	.89	.43	
5	自分では手におえないと考え放棄する。	2.00	.88	2.05	.91	1.93	.81	1.45	
6	対処できない問題だと考え、放棄する。	1.96	.88	2.03	.92	1.84	.80	2.33	*
	「情報収集」因子	7.11	2.48	7.06	2.63	7.18	2.19	.48	
7	力のある人に教えを受けて解決しようとする。	2.14	1.00	2.12	1.03	2.16	.94	.32	
8	詳しい人から自分に必要な情報を収集する。	2.48	.99	2.51	1.03	2.42	.93	.97	
9	すでに経験した人から話を聞いて参考にする。	2.49	.99	2.43	1.01	2.60	.93	1.87	+
	「気晴らし」因子	7.58	2.31	7.29	2.38	8.09	2.10	3.70	**
10	スポーツや旅行などを楽しむ。	2.30	1.05	2.31	1.06	2.28	1.05	.34	
11	買い物やおしゃべりなどで時間をつぶす。	2.64	1.01	2.46	1.03	2.94	.91	5.11	**
12	友達とお酒を飲んだり好きな物を食べたりする。	2.65	1.02	2.52	1.07	2.87	.89	3.72	**
	「回避的思考」因子	6.79	2.36	6.85	2.43	6.68	2.22	.76	*
13	嫌なことは考えないようにする。	2.56	1.00	2.59	1.03	2.49	.93	1.03	
14	悩んでいることを忘れるようにする。	2.34	.97	2.38	1.00	2.27	.92	1.16	
15	無理にでも忘れるようにする。	1.89	.92	1.88	.94	1.91	.89	.40	
	「肯定的解釈」因子	7.76	2.22	7.67	2.29	7.91	2.08	1.14	
16	楽観的に考える。	2.66	1.02	2.72	1.05	2.56	.96	1.65	
17	今後は良いこともあるだろうと考える。	2.65	.99	2.59	1.02	2.75	.94	1.77	+
18	悪い面ばかりでなく良い面を見つけていく。	2.44	.90	2.36	.92	2.59	.84	2.76	**
	「計画立案」因子	7.18	2.39	7.31	2.43	6.96	2.30	1.52	
19	原因を追求し、後の計画を立てる。	2.30	.99	2.31	1.02	2.28	.94	.39	
20	どのような対策をとるべきか綿密に考える。	2.31	1.02	2.40	1.03	2.17	.99	2.33	*
21	過ぎた事の反省を踏まえ次にする事を考える。	2.56	.90	2.60	.93	2.51	.87	.98	
	「責任転嫁」因子	3.54	1.46	3.69	1.57	3.28	1.20	2.98	**
22	自分は悪くないと言い逃れをする。	1.92	.82	1.99	.88	1.80	.71	2.44	*
23	責任を他の人に押し付ける。	1.62	.84	1.70	.90	1.48	.69	2.77	**

ただし、**： $p<.01$ 、*： $p<.05$ 、+： $p<.10$ とする。

自分は悪くないと言い逃れをする。」(男性1.99 [.88]; 女性1.80 [.71], $p<.05$)、「23.責任を他の人に押し付ける。」(男性1.70 [.90]; 女性1.48 [.69], $p<.01$) の4項目であった。男性の方が女性よりも責任転嫁や放棄に関する対処行動を多くとっていた。

一方、6項目で女性の平均値の方が男性の平均値よりも有意に高かった。すなわち、「1.誰かに話を聞いてもらい冷静さを取り戻す。」(男性2.15 [.96]; 女性2.99 [.87], $p<.01$) 「2.誰かに話を聞いてもらい、気を晴らす。」(男性2.35 [.99]; 女性3.24 [.87], $p<.01$)、「3.誰かに愚痴をこぼして憂さを晴らす。」(男性2.33 [1.04]; 女性2.91 [.93], $p<.01$)、「11.買い物やおしゃべりなどで時間をつぶす。」(男性2.46 [1.03]; 女性2.94 [.91], $p<.01$)、「12.友達とお酒を飲んだり好きな物を食べたりする。」(男性2.52 [1.07]; 女性2.87 [.89], $p<.01$)、「18.悪い面ばかりでなく良い面を見つけていく。」(男性2.36 [.92]; 女性2.59 [.84], $p<.01$)、また、有意傾向が見られたのは、「9.すでに経験した人から話を聞いて参考にする。」(男性2.43 [1.01]; 女性2.60 [.93]) と「17.今後は良いこともあるだろうと考える。」(男性2.59 [1.02]; 女性2.75 [.94]) の2項目であり、女性の平均値の方が男性の平均値よりも高い傾向が見られた。女性の方が男性よりもカタルシスや気晴らしに関する対処行動を多くとっていた。

次に因子ごとに合計得点を算出し、各因子の得点とした。各因子についてt検定により性差を分析した結果をTABLE2に示した。「カタルシス」因子(男性6.84 [2.53]; 女性9.13 [2.23], $p<.01$)、「気晴らし」因子(男性7.29 [2.38]; 女性8.09 [2.10], $p<.01$)、「回避的思考」因子(男性6.85 [2.43]; 女性6.68 [2.22], $p<.05$)、「責任転嫁」因子(男性3.69 [1.57]; 女性3.28 [1.20], $p<.01$) の4つの因子で有意差が見られた。また、「放棄・あきらめ」因子(男性6.51 [2.22]; 女性6.15 [1.93]) において有意傾向が見られた。「カタルシス」因子と「気晴らし」因子において女性の平均値の方が男性の平均値よりも有意に高かった。一方、「回避的思考」因子と「責任転嫁」因子で男性の平均値の方が女性の平均値よりも有意に高く、「放棄・あきらめ」因子でも男性の平均値の方が女性の平均値よりも有意に高い傾向が見られた。女性の方が男性よりもカタルシスや気晴らしのようなポジティブな対処行動をとることが多く、反対に、男性の方が女性よりも回避的思考や責任転嫁のようなネガティブな対処行動をとることが多かった。

(2) 友人関係に関する項目の分析

小学生、中学生、高校生の3つの時期について、過去に友人関係について悩んだかどうかについて尋ねた。3項目に関して、「よく悩んだ」、「ときどき悩んだ」、「まったく悩まなかった」の3件法で回答を求めた。この3つの時期と男女別の回答者数(%)をTABLE3に示した。小学生の時、中学生の時、高校生の時の3つの時期において、性別と回答者数について χ^2 分析を行った。その結果、3つの時期において有意差が見られた(小学生 $\chi^2(2) = 52.4, p<.001$; 中学生 $\chi^2(2) = 57.9, p<.001$; 高校生 $\chi^2(2) = 22.4, p<.001$)。すなわち、性別によって3つの時期とも回答者数に違いが見られ、悩んだ程度が異なっていた。3つの時期とも女性の悩んだ割合が男性の悩んだ割合よりも高く、女性の方が男性よりも友だちとの関係で過去に悩むことが多く、特に中学生の時期に男女とも悩むことが多かった。

TABLE3 友だちとの関係項目の男女別の人数(%)

		よく悩んだ		ときどき悩んだ		まったく悩まなかった		χ ²
		人数	%	人数	%	人数	%	
小学生のときに、友だちとの関係で悩んだことがある。								
男	性	46	15.5	96	32.3	155	52.2	* *
女	性	47	27.0	95	54.6	32	18.4	
中学生のときに、友だちとの関係で悩んだことがある。								
男	性	54	18.2	155	52.2	88	29.6	* *
女	性	83	47.7	77	44.3	14	8.0	
高校生のときに、友だちとの関係で悩んだことがある。								
男	性	39	13.1	138	46.5	120	40.4	* *
女	性	44	25.3	93	53.4	37	21.3	

ただし、**：p<.01である。

TABLE4 友人との相互の受容感項目のクロス表分析(人数：%)

		現在、自分は、友だちを受け入れていると思う。									
		とても受け入 れている		少し受け入 れている		どちらともい えない		あまり受け入 れていない		まったく受け 入れていない	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
現在、自分 は、友だち から受け入 れられている と思う。	とても受け入れ られている	111	23.6%	15	3.2%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.4%
	少し受け入れら れている	75	15.9%	123	26.1%	13	2.8%	7	1.5%	0	0.0%
	どちらともいえ ない	22	4.7%	40	8.5%	44	9.3%	5	1.1%	0	0.0%
	あまり受け入れ られていない	2	0.4%	1	0.2%	4	0.8%	2	0.4%	1	0.2%
	まったく受け入 れていない	1	0.2%	0	0.0%	1	0.2%	0	0.0%	2	0.4%
合 計		211	44.8%	179	38.0%	62	13.2%	14	3.0%	5	1.1%
										471	100.0%

次に、現在の友人関係における被受容感と受容感について尋ねた。被受容感と受容感のクロス表をTABLE4に示した。友人から「とても受け入れられている」と「少し受け入れられている」と感じている被受容感のある人は、346名(73.5%)であった。また、友人を「とても受け入れられている」と「少し受け入れている」と感じている受容感のある人は、390名(82.8%)であった。被受容感と受容感の両方を感じている人は324名(68.8%)であった。反対に、友人から「まったく受け入れられていない」と「あまり受け入れられていない」と感じている被受容感のない人は、14名(3.0%)であった。また、友人を「まったく受け入れられていない」と「あまり受け入れられていない」と感じている受容感のない人は19名(4.0%)であった。

そして、被受容感と受容感の両方を感じていない人は5名(1.1%)であった。被受容感は感じているが、受容感を感じていない人は9名(1.9%)であり、被受容感を感じていないが、受容感を感じている人は4名(0.8%)であった。ここで示された18名(3.8%)は対人関係において相互の受容感になんらかのアンバランスを感じているといえる。

（3）対人不安尺度の分析

35項目に関して、「非常にあてはまる」の7点から「全然あてはまらない」の1点までとして得点化した。得点が高いほど、その傾向が高いことを示している。各因子を構成する合計得点を算出し、各因子の得点とした。全体の平均値〔SD〕は「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子が21.00〔4.59〕、「他者からの受容」因子が17.97〔4.64〕、「他者の印象への過剰意識」因子が23.33〔6.87〕、「自己卑下・劣等感」因子が20.73〔6.45〕、「対人的緊張・あがり」因子が20.28〔6.71〕であった。

性差についてt検定によって分析した結果、「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子において有意差が見られた（ $t(469) = 4.22, p < .01$ ）。男性の平均値〔SD〕は20.33〔4.91〕であり、女性の平均値は、22.15〔3.72〕であり、女性の平均値の方が男性の平均値よりも有意に高かった。また、「他者からの受容」因子において有意傾向が見られた（ $t(469) = 1.93$ ）。男性の平均値〔SD〕は17.66〔4.66〕であり、女性の平均値は、18.51〔4.58〕であり、女性の平均値の方が男性の平均値よりも有意に高い傾向が見られた。

女性の方が男性よりも他者に対して照れや気恥ずかしさを感じやすく、対人場面において他者からの受容感が高い傾向が見られた。八木（2004,2007）でも同様に「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子において女性の平均値の方が男性よりも有意に高い結果が示されている。

（4）対人関係における対処行動と友人関係の意識との関連

過去の友人関係に関する意識との関連を見るために過去に悩んだ程度ごとに一元配置（3水準、「よく悩んだ」群・「時々悩んだ」群・「全く悩まなかった」群）の分散分析を行った。その結果、小学生の時では、悩んだ程度に応じて「カタルシス」と「気晴らし」で有意差が見られた。「カタルシス」の群別平均値〔SD〕は、「よく悩んだ」群7.72〔2.66〕、「時々悩んだ」群8.02〔2.61〕、「全く悩まなかった」群7.34〔2.68〕であった（ $F(2,468) = 3.12, p < .05$ ）。TukeyのHSDによる下位分析を行った結果、「時々悩んだ」群>「全く悩まなかった」群であった。「気晴らし」の群別平均値〔SD〕は、「よく悩んだ」群7.30〔2.14〕、「時々悩んだ」群7.92〔2.25〕、「全く悩まなかった」群7.38〔2.42〕であった（ $F(2,468) = 3.50, p < .05$ ）。TukeyのHSDによる下位分析を行った結果、有意差は見られなかった。小学生の時に悩んだ程度に応じて現在とっている対処行動に明確な関連は見られなかった。

中学生の時では、悩んだ程度に応じて「カタルシス」と「肯定的解釈」で有意差が見られた。「カタルシス」の群別平均値〔SD〕は、「よく悩んだ」群8.39〔2.57〕、「時々悩んだ」群7.61〔2.52〕、「全く悩まなかった」群6.93〔2.87〕であった（ $F(2,468) = 9.28, p < .01$ ）。TukeyのHSDによる下位分析を行った結果、「よく悩んだ」群>「時々悩んだ」群、「よく悩んだ」群>「全く悩まなかった」群であり、「よく悩んだ」群の平均値が他の2群の平均値よりも有意に高かった。「肯定的解釈」の群別平均値〔SD〕は、「よく悩んだ」群7.54〔2.35〕、「時々悩んだ」群7.66〔2.10〕、「全く悩まなかった」群8.27〔2.23〕であった（ $F(2,468) = 3.73, p < .05$ ）。TukeyのHSDによる下位分析を行った結果、「よく悩んだ」群<「全く悩まなかった」群、「時々悩んだ」群<「全

く悩まなかった」群であり、「全く悩まなかった」群の平均値が他の2群の平均値よりも有意に高かった。友人関係において中学生の時によく悩んだ人は現在、「カタルシス」の対処行動をとることが多く、まったく悩まなかった人は現在「肯定的解釈」の対処行動をとることが多かった。

高校生の時では、悩んだ程度に応じて「カタルシス」だけで有意差が見られた。「カタルシス」の群別平均値 [SD] は、「よく悩んだ」群8.36 [2.60]、「時々悩んだ」群7.98 [2.62]、「全く悩まなかった」群6.90 [2.58] であった ($F(2,468) = 11.50, p < .01$)。TukeyのHSDによる下位分析を行った結果、「よく悩んだ」群 > 「全く悩まなかった」群、「時々悩んだ」群 > 「全く悩まなかった」群であり、「全く悩まなかった」群の平均値が他の2群の平均値よりも有意に低かった。高校生の時に対人関係において悩んだ人の方が現在「カタルシス」の対処行動をとることが多かった。

小学生の時に友人関係で悩んだ程度は現在の対処行動にあまり影響していなかった。しかし、中学生と高校生の時に友人関係について悩んでいた人ほど「カタルシス」の対処行動をとることが多く、「肯定的解釈」の対処行動をとることが少なかった。中学生と高校生の時に友人関係について悩んだ経験は、現在の「カタルシス」というポジティブな対処行動を現在とっていることに関係していた。しかし、ネガティブな対処行動では差がなく、過去に友人関係について悩んだ経験がネガティブな対処行動の形成に関係していないと考えられる。

次に、現在の友人関係における相互の受容感について検討した。「とても受け入れられている [受け入れている]」と「少し受け入れられている [受け入れている]」を回答した合計人数を被受容群 [受容群] とし、「どちらともいえない」を中間群、「あまり受け入れられていない [受け入れていない]」と「まったく受け入れられていない [受け入れていない]」と回答した合計人数を非被受容群 [非受容群] とした。各群の人数は被受容群346名 (73.4%)、中間群111名 (23.6%)、非被受容群14名 (3.0%) であり、受容群390名 (82.8%)、中間群62名 (13.2%)、非受容群19名 (4.0%) であった。

相互の受容感2項目についてそれぞれ一元配置 (3水準) の分散分析を行った。その結果をTABLE5に示した。友人から受け入れられていると思うかどうかという被受容感では、「放棄・あきらめ」、「気晴らし」、「肯定的解釈」の3つの因子で有意差が見られ、「情報収集」と「責任転嫁」の2つの因子で有意傾向が見られた。「放棄・あきらめ」の群別平均値 [SD] は、被受容群6.22 [2.07]、中間群6.72 [2.19]、非被受容群7.43 [2.44] であった ($F(2,468) = 4.18, p < .05$)。「気晴らし」の群別平均値 [SD] は、被受容群7.79 [2.28]、中間群6.97 [2.25]、非被受容群7.29 [2.73] であった ($F(2,468) = 5.50, p < .01$)。TukeyのHSDによる下位分析を行った結果、被受容群 > 中間群であった。「肯定的解釈」の群別平均値 [SD] は、被受容群7.96 [2.18]、中間群7.25 [2.19]、非被受容群6.71 [2.49] であった ($F(2,468) = 6.00, p < .01$)。TukeyのHSDによる下位分析を行った結果、被受容群 > 中間群であった。「情報収集」の群別平均値 [SD] は、被受容群7.22 [2.47]、中間群6.67 [2.37]、非被受容群7.79 [2.99] であった ($F(2,468) = 2.66$)。「責任転嫁」の群別平均値 [SD] は、被受容群3.44 [1.45]、中間群3.76 [1.40]、非被受容群4.07 [1.82] であった ($F(2,468) = 2.97$)。

TABLE5 友人関係における相互の受容感の群別比較

		M	SD		M	SD	
カタルシス	被受容群	7.81	2.63		受容群	7.86	2.59
	中間群	7.35	2.73		中間群	6.56	2.73
	非被受容群	7.29	2.81		非受容群	7.84	3.08
放棄・あきらめ	被受容群	6.22	2.07		受容群	6.31	2.09
	中間群	6.72	2.19	*	中間群	6.73	2.21
	非被受容群	7.43	2.44		非受容群	6.58	2.48
情報収集	被受容群	7.22	2.47		受容群	7.23	2.41
	中間群	6.67	2.37	+	中間群	6.35	2.70
	非被受容群	7.79	2.99		非受容群	7.00	2.77
気晴らし	被受容群	7.79	2.28		受容群	7.71	2.26
	中間群	6.97	2.25	**	中間群	7.03	2.35
	非被受容群	7.29	2.73		非受容群	6.84	2.95
回避的思考	被受容群	6.71	2.28		受容群	6.74	2.30
	中間群	6.88	2.49		中間群	6.76	2.51
	非被受容群	7.93	2.95		非受容群	7.74	2.86
肯定的解釈	被受容群	7.96	2.18		受容群	7.92	2.14
	中間群	7.25	2.19	**	中間群	6.69	2.41
	非被受容群	6.71	2.49		非受容群	7.95	2.20
計画立案	被受容群	7.15	2.36		受容群	7.21	2.35
	中間群	7.27	2.48		中間群	6.87	2.45
	非被受容群	7.07	2.59		非受容群	7.47	3.06
責任転嫁	被受容群	3.44	1.45		受容群	3.46	1.40
	中間群	3.76	1.40	+	中間群	3.85	1.48
	非被受容群	4.07	1.82		非受容群	4.11	2.11

ただし、** : $p<.01$ 、* : $p<.05$ 、+ : $p<.10$ である。

有意差が見られた3つの因子でTukeyのHSDによる下位分析を行ったが、有意差は2つの因子で被受容群と中間群で見られただけであった。これは非被受容群の人数が少ないことによるが、平均値を見ると「気晴らし」と「肯定的解釈」という2つのポジティブな対処行動で被受容群の平均値が他の2群よりも高く、「放棄・あきらめ」というネガティブな対処行動で被受容群の平均値が他の2群よりも低かった。友人から受け入れられていると感じている人ほど「気晴らし」や「肯定的解釈」というポジティブな対処行動をとり、「放棄・あきらめ」というネガティブな対処行動をとらなかった。

受容感では、「カタルシス」、「情報収集」、「気晴らし」、「肯定的解釈」、「責任転嫁」の5つの因子で有意差が見られた。「カタルシス」の群別平均値 [SD] は、受容群7.86 [2.59]、中間群6.56 [2.73]、非受容群7.84 [3.08] であった ($F(2,468) = 6.52$, $p<.01$)。TukeyのHSDによる下位分析を行った結果、受容群>中間群であった。「情報収集」の群別平均値 [SD] は、受容群7.23 [2.41]、中間群6.35 [2.70]、非受容群7.00 [2.77] であった ($F(2,468) = 3.40$, $p<.05$)。TukeyのHSDによる下位分析を行った結果、受容群>中間群であった。「気晴らし」の群別平均値 [SD] は、受容群7.71 [2.26]、中間群7.03 [2.35]、非受容群6.84 [2.95] であった ($F(2,468) = 3.34$, $p<.05$)。「肯定的解釈」の群別平均値 [SD] は、受容群7.92 [2.14]、中間群6.69 [2.41]、非受容群7.95 [2.20] であった ($F(2,468) = 8.47$, $p<.01$)。TukeyのHSDによる下位分析を行っ

た結果、受容群>中間群であった。「責任転嫁」の群別平均値 [SD] は、受容群3.46 [1.40]、中間群3.85 [1.48]、非受容群4.11 [2.11] であった ($F(2,468) = 3.56, p < .05$)。

有意差が見られた5つの因子でTukeyのHSDによる下位分析を行ったが、有意差は3つの因子で受容群と中間群で見られただけであった。これは被受容感と同様に非受容群の人数が少ないことによる。しかし、平均値を見ると「カタルシス」、「情報収集」、「肯定的解釈」という3つのポジティブな対処行動では受容群の平均値は中間群よりも有意に高いが、非受容群とはほとんど差がなかった。また、「気晴らし」では、受容群の平均値が他の2群よりも高かった。「責任転嫁」のネガティブな対処行動では受容群の平均値が他の2群よりも低かった。友人を受け入れていると感じている人も感じていない人もポジティブな対処行動はとっていたが、友人を受け入れていると感じている人は「責任転嫁」というネガティブな対処行動はとっていなかった。

(5) 対人関係における対処行動と対人不安との関連

対人不安尺度の因子ごとに合計得点を算出し、各因子の得点をもとに $M \pm 1/2SD$ を基準に高群と低群の2群に分けた。「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子の高群24点以上 ($N=157$ [33.3%])、低群18点以下 ($N=109$ [23.1%])、「他者からの受容」因子の高群21点以上 ($N=137$ [29.1%])、低群15点以下 ($N=129$ [27.4%])、「他者の印象への過剰意識」因子の高群27点以上 ($N=150$ [31.8%])、低群19点以下 ($N=145$ [30.8%])、「自己卑下・劣等感」因子の高群24点以上 ($N=158$ [33.5%])、低群17点以下 ($N=145$ [30.8%])、「対人的緊張・あがり」因子の高群79点以上 ($N=146$ [31.0%])、低群61点以下 ($N=129$ [27.4%]) であった。

TABLE6 対人不安尺度の5因子の高低群別の比較

対処行動	対人不安 尺度の高 低群	「他者への照 れ・気恥ずか しさ」因子		「他者からの 受容」因子		「他者の印象 への過剰意 識」因子		「自己卑下・ 劣等感」因子		「対人的緊張・ あがり」因子	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
カタルシス	高群	8.22	2.71	8.18	2.57	7.81	2.62	7.80	2.63	7.87	2.54
	低群	7.05	2.70	7.04	2.83	7.72	2.86	7.48	2.67	7.49	2.87
放棄・あきらめ	高群	6.20	2.17	6.47	2.25	6.84	2.26	6.98	2.23	6.97	2.09
	低群	6.49	2.26	6.29	2.09	5.84	1.99	5.88	2.04	5.70	2.14
情報収集	高群	7.20	2.52	7.53	2.49	7.31	2.52	7.23	2.57	7.21	2.48
	低群	7.14	2.57	6.36	2.41	7.01	2.38	7.05	2.53	6.97	2.64
気晴らし	高群	7.65	2.44	7.91	2.39	7.55	2.24	7.40	2.40	7.61	2.20
	低群	7.83	2.36	7.16	2.40	7.66	2.38	7.90	2.44	7.95	2.42
回避的思考	高群	6.92	2.62	7.03	2.60	6.81	2.42	6.61	2.62	6.79	2.28
	低群	6.49	2.23	6.54	2.30	6.57	2.35	7.00	2.36	6.59	2.43
肯定的解釈	高群	8.06	2.29	7.95	2.14	7.49	2.23	7.27	2.30	7.53	2.17
	低群	7.47	2.29	7.64	2.35	7.93	2.38	8.67	2.13	8.09	2.33
計画立案	高群	7.68	2.34	7.30	2.42	7.51	2.37	7.22	2.35	7.10	2.43
	低群	7.06	2.60	7.23	2.64	7.10	2.41	7.46	2.47	7.23	2.56
責任転嫁	高群	3.56	1.57	3.61	1.58	3.85	1.59	3.82	1.64	3.79	1.53
	低群	3.56	1.48	3.43	1.42	3.23	1.30	3.37	1.40	3.26	1.46

ただし、** : $p < .01$ 、* : $p < .05$ 、+ : $p < .10$ である。

高低群別に t 検定によって分析した結果をTABLE6に示した。「他者への照れ・気恥ずかしさ」因子では、「カタルシス」($t(264) = 3.47, p < .01$)、「肯定的解釈」($t(264) = 2.06, p < .05$)、「計画立案」($t(264) = 2.03, p < .05$)の3つの因子で有意差が見られ、3つの因子とも高群の平均値の方が低群の平均値よりも有意に高かった。対人関係場面で他者への照れや気恥ずかしさを感じる人ほど「カタルシス」、「肯定的解釈」、「計画立案」というポジティブな対処行動をとっていた。「他者からの受容」因子では、「カタルシス」($t(264) = 3.43, p < .01$)、「情報収集」($t(264) = 3.88, p < .01$)、「気晴らし」($t(264) = 2.55, p < .05$)の3つの因子で有意差が見られ、3つの因子とも高群の平均値の方が低群の平均値よりも有意に高かった。他者からの受容感が高い人ほど「カタルシス」、「情報収集」、「気晴らし」というポジティブな対処行動をとっていた。

「他者の印象への過剰意識」因子では、「放棄・あきらめ」($t(293) = 4.02, p < .01$)と「責任転嫁」($t(293) = 3.66, p < .01$)の2つの因子で有意差が見られ、「肯定的解釈」($t(293) = 1.66$)で有意傾向が見られた。「放棄・あきらめ」と「責任転嫁」の2因子とも高群の平均値の方が低群の平均値よりも有意に高く、「肯定的解釈」因子では高群の平均値の方が低群の平均値よりも有意に低い傾向が見られた。他者の印象に対して過剰に意識している人ほど「放棄・あきらめ」と「責任転嫁」というネガティブな対処行動をとっており、「肯定的解釈」というポジティブな対処行動はあまりとっていなかった。

「自己卑下・劣等感」因子では、「放棄・あきらめ」($t(301) = 4.49, p < .01$)、「肯定的解釈」($t(301) = 5.49, p < .01$)、「責任転嫁」($t(301) = 2.52, p < .05$)の3つの因子で有意差が見られ、「気晴らし」($t(301) = 1.79$)で有意傾向が見られた。「放棄・あきらめ」と「責任転嫁」の2因子とも高群の平均値の方が低群の平均値よりも有意に高く、「肯定的解釈」因子では高群の平均値の方が低群の平均値よりも有意に低かった。「気晴らし」因子では高群の平均値の方が低群の平均値よりも有意に低い傾向が見られた。対人関係において自己卑下や劣等感を感じている人ほど「放棄・あきらめ」と「責任転嫁」というネガティブな対処行動をとっており、「肯定的解釈」や「気晴らし」というポジティブな対処行動はとっていなかった。

「対人的緊張・あがり」因子では、「放棄・あきらめ」($t(273) = 5.00, p < .01$)、「肯定的解釈」($t(273) = 2.06, p < .05$)、「責任転嫁」($t(273) = 3.94, p < .01$)の3つの因子で有意差が見られた。「放棄・あきらめ」と「責任転嫁」の2因子とも高群の平均値の方が低群の平均値よりも有意に高く、「肯定的解釈」因子では高群の平均値の方が低群の平均値よりも有意に低かった。対人関係場面で緊張やあがりを感じている人ほど「放棄・あきらめ」と「責任転嫁」というネガティブな対処行動をとっており、「肯定的解釈」というポジティブな対処行動はとっていなかった。

まとめ

本研究では、第一に、対処行動が網羅的に含まれている神村他(1995)で作成されたTAC-24の項目をもとに、対人関係用に修正した対人関係用対処行動尺度を作成し、その因子構造について確認し、第二に、作成した対人関係用対処行動尺度と友人関係、対人不安との関係について

て検討した。その結果、第一に、対人関係用対処行動尺度において神村他（1995）と同様の8つの因子が確認された。第二に、小学生、中学生、高校生の時に友人関係において悩んだ程度と対処行動の関係を検討した結果、中学生と高校生の時によく悩んだ経験のある人の方が、「カタルシス」というポジティブな対処行動を現在とっていることが多かった。ネガティブな対処行動では悩んだ程度による差がなく、過去に友人関係について悩んだ経験は、ポジティブな対処行動の形成に関係していることが考えられ、発達の観点から今後検討することが必要と考えられる。

現在の友人との相互の受容感との関係から対処行動を検討した結果、友人から受け入れられていると感じている人は「気晴らし」や「肯定的解釈」というポジティブな対処行動を現在とっていることが多く、「放棄・あきらめ」というネガティブな対処行動をとることは少なかった。しかし、友人を受け入れていると感じている受容感ではこのような傾向は見られなかった。また、対人不安との関係では、「カタルシス」や「肯定的解釈」というポジティブな対処行動で関連が見られ、「放棄・あきらめ」や「責任転嫁」というネガティブな対処行動でも関連が見られた。

松尾・佐藤（2003）は大学生の友人関係認知、教師関係認知およびストレス反応と学校享受感との関連を検討した結果、身体的反応、抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無気力の4つの因子からなるストレス反応が学校享受感と負の相関関係があるが、友人関係認知と教師関係認知では、あまり関係がないことを示している。また、橋本（2000）では対人方略と対人ストレスイベントとの関連が検討され、内省傾向と気遣いという対人方略が対人ストレスと関連していることを示しているが、それ以外では明確な関連は見られていない。また、心理的ストレスへの家族や友人の介入の影響も検討しているが、抱えている問題を周囲の人が気づいているかどうかの影響していることを指摘している（橋本,2002）。本研究でも過去に友人関係において悩んだ経験の程度はポジティブな対処行動に関連していたが、ネガティブな対処行動では差がなかった。現在の友人との相互の受容感においても友人を受け入れていると感じている受容感では対処行動において関連はあまり見られなかった。

対人関係は周囲の人間関係も関連して成立することが多い。また固定されたものでなく、一定の期間で変化・進展していくことが多い。したがって、その個人が抱える問題も常態化・慢性化する場合もあれば、対人関係や集団の変化、個人的な対応、ソーシャルサポートの介入などの要因によって解決していく場合もある。そして、個人的に適応していくことも考えられる。第一に、ストレスイベントを焦点化してストレス反応と対処行動を媒介する要因を検討することが必要であろう。また、相互の受容感に関する分析では、18名（3.8%）の大学生が対人関係においてなんらかのアンバランスを感じていることが示された。このような学生への支援方法を考えるためにも問題を抱えている少数の学生への検討から対処行動や媒介要因を検討することも必要であろう。

次に、対人不安においては、「カタルシス」や「肯定的解釈」というポジティブな対処行動で関連が見られ、「放棄・あきらめ」や「責任転嫁」というネガティブな対処行動で関連が見

られた。尾関・原口・津田（1991）は、MPI尺度によって測定されたパーソナリティと対処行動との関連も検討しているが、明確な関連は見出されていない。今後は性別に応じて、どのようなパーソナリティ特性がどのような具体的な対処行動に影響を与えているのか、その結果、対人関係においてどのような支援が必要であるのかについて検討することが必要であろう。

引用文献

- 林洋一・小川捷之 1981 「対人不安意識尺度構成の試み」 横浜国立大学保健管理センター年報,1,29-46.
- 橋本剛 1997 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究,13,1,64-75.
- 橋本剛 2000 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究,48,94-102.
- 橋本剛 2002 対人関係領域による支援的／問題的介入と心理的ストレスの関連 人文論集：静岡大学人文学部人文学科研究報告,52,2,91-106.
- 加藤司 2000 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成 教育心理学研究,48,225-234.
- 加藤司 2001 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究,49,295-304.
- 加藤司 2007 大学生における友人関係の親密性と対人ストレス過程との関連性の検証 社会心理学研究,23,2,152-161.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1995 対処方略の三次元モデルと新しい尺度（TAC-24）の作成 教育相談研究,33,41-47.
- Lazarus,R.S.,& Folkman,S. 1984 Stress,appraisal,and coping.New York:Springer Publishing Company.（本明寛・春木豊・織田正美（監訳）1991 ストレスの心理学－認知的評価と対処の研究－ 実務教育出版）.
- 松尾美耶・佐藤公代 2003 大学生の対人関係認知およびストレス反応と学校享受感の関連 愛媛大学教育学部紀要・教育科学,49,2,49-55.
- 日本健康心理学研究所 1996 ラザルス式ストレスコーピングインベントリー〔SCI〕 実務教育出版.
- 尾関友佳子 1993 大学生用ストレス自己評価尺度の改定：トランスアクションナルな分析に向けて 久留米大学大学院比較文化研究科年報,1,95-114.
- 尾関友佳子・原口雅浩・津田彰 1991 大学生の生活ストレス、コーピング、パーソナリティとストレス反応 健康心理学研究,4,2,1-9.
- 佐藤朗子 1996 女子青年の愛着と対処行動の関係 日本発達心理学会第7回大会発表論文集,203.
- 佐藤朗子 1997 青年の対処行動と対人関係の関連に関する予備的検討 新潟青陵女子短期大学研究報告,27,133-142.
- 八木成和 2004 「青年期の対人関係に関する研究（Ⅰ）－対人不安尺度とTEGとの関連について－」 四天王寺国際仏教大学紀要人文社会学部,37,57-68.
- 八木成和 2005 「青年期の対人関係に関する研究（Ⅱ）－対人不安の性差に影響する要因について－」 四天王寺国際仏教大学紀要人文社会学部,38,79-91.
- 八木成和 2008 「青年期の対人関係に関する研究（Ⅲ）－対人不安と社会的外向性・独立性との関連について－」 四天王寺国際仏教大学紀要人文社会学部,45,241-251.

A Study (Ⅳ) of Interpersonal Relationships in Early Adulthood.

- social anxiety and coping behavior among friends -

Shigekazu YAGI

The purposes of the present study were: (1) to construct a Coping Behavior Scale in order to assess interpersonal stress (2) to examine the relation between coping behavior and interpersonal relationships (3) to examine the relation between coping behavior and social anxiety.

Undergraduates completed a questionnaire. (1) a factor analysis identified eight factors of coping behavior (2) interpersonal relations were correlated with positive coping behaviors (3) social anxiety was correlated with both positive and negative coping behaviors.

Overall, the results suggest that intervention is necessary to reduce the impact of interpersonal stress by sexes.

Key Words: Interpersonal Relations, Early Adulthood, Coping Behavior, Social Anxiety